
大阪恋物語

snow+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大阪恋物語

【Nコード】

N8814A

【作者名】

snow+

【あらすじ】

ある日、和葉に男友達を紹介された平次。しかしその男は和葉が好きで。二人を見ていられない平次は、家出してしまう…?!果たして、平次と和葉はどうなるのか…!

和葉の男友達（前書き）

りようこ様からのリクエストです。

平次と和葉のラブコメです。

正直、内容がちゃんとラブになればいいな、と思っているのですが

（爆）

ボチボチUPしていきます。

小説名ベタですみません（爆）

連載完結したら、いい小説名案募集します。（苦笑）

和葉の男友達

とある日。

平次はいつもと同じように和葉と学校に登校する待ち合わせをしていた。

時計を見ると待ち合わせ時間を三分過ぎたとき、和葉が向こうから走って来た。

「平次ー！遅なつて堪忍なー！」

「何やつとつたんや！いつもは遅いゆうくせに！」

ハアハアと息を切らせ、和葉は慌てて走って来た。

「はよ行くで！」

「あ！ちよつと待って！紹介したい人が……」

「あ？」

和葉の背後には、スラツと背が高く、ストレートショートショートの髪には少し茶色が入っている男性が立っている。年は同じだろうか。

「初めまして！」

「……誰やねん？」

平次はその男を指差しながら見上げ、和葉に聞いた。

「この人は、東京から引越して来はつた安斎勇登君アンサイユウトやねん！」

「どうも。安斎勇登ですっ！」

「はあ。」

平次は勇登を見、少し不満そうだ。自分の幼馴染みがいきなり知らない男を連れて来たのだから。

「……なんで一緒にいんのや？」

「ウチの町内に越して来はつたんや！アタシと学校違っし、慣れるまで送ってあげんの。ええやろ？」

平次はそれでも不満な顔をしたら、二人を見ていた勇登が聞いてきた。

「もしかして……二人って付き合ってるの？」

「ちゃう、ちゃう！ただの幼馴染みやで！」

和葉が速攻で返事を返す。と、平次も続いた。

「こんな彼女な訳あらへんやろ？」

「それはこっちのセリフやわ！」

「なんやて?!」

勇登は二人を苦笑いで見、喧嘩を止めようとした。

「まあまあ…。もう学校始まるぜ？」

「あつ！ゴメンな！勇登君…。こんなとこ見られんの、恥ずかしいわぁ！」

「いいの、いいの！俺のことは気にしないでよっ！」

「でもさあ!!」

「二人つて、仲良いんだね！」

平次は和葉と勇登のやりとりを見、少しムカツとした。

「…俺、行くしな！」

「あつ、アタシ勇登君送って行ったらなアカンねん…」

「勝手にしろ！俺は知らん！」

と言うと、平次は一人早歩きで改方学園へと向かった。

それを見た勇登は、思わず和葉に質問した。

「い、いいの?!」

「あんな放つといてもええねん!!はよ、行こ行こ！」

和葉は勇登の背中を押し、二人は改方学園とは逆の勇登の高校へと向かった。

平次の嫉妬？

「な〜んか…わりいね。」

「へ？何がなん？」

勇登の高校に向かつている途中、勇登は平次と和葉のことを気にしているように話した。

「服部君と一緒に学校行きたかっただろ？」

「え…？」

和葉の頬はピンク色になったが、首を横に振ってみせ少し怒った顔で返事をした。

「そんな訳あらへんよっ！」

「うっん！だって和葉ちゃん、オレが引っ越して来てからずっと会話が服部君の話だもんねっ！」

勇登は意地悪そうに言ってみせた。

「ゆ、勇登君？！何ゆーてんの…！」

今度ばかりは隠せないように、和葉の頬は真っ赤になった。

「しかし服部君も、こんなカワイイ子にあんな態度とはね…。」

「…え？」

和葉は立ち止まり、胸がドクンと鳴った。

「学校見えてきたし、ここでいいやつ！じゃあね！ありがとう！」
そんな和葉をよそに、勇登は早歩きで学校を目指した。

「うん！（…この気持ち…なんなんやる。）」

和葉はしばらく勇登を見送っていたが、時計を見慌てて改方学園へと向かった。

その日の放課後。

” たあーっ！ ”

《一本！》

「どうしたんや、服部？」

放課後の部活動。平次はもちろん剣道の練習中だ。

しかしいつもより弱い平次に、顧問が話掛けてきた。

「すんません！ちよつと考え事しとって…」

苦笑いで誤魔化そうとする平次の内心は、和葉と勇登のことではあった。

「大会も近いのに、これやったらまた沖田に負けんで！しっかりせえやあ！」

「はいっ！（あゝアカン！！なんでやねん……）」

顧問に背中をポンと叩かれ、平次は頭をぐしゃぐしゃに搔きながら休憩場に戻った。

そこには、タオルと水を持った和葉の姿が。

「どうしたん？今日の平次、いつもとちやうやん？」

タオルを差し出し、困った顔をする和葉に、平次は心と違った言葉が出てしまう。

「…やかましいわ！お前の顔見たらやる気なくなる。今日は早退するわ！」

「は？！アンタ何ゆうてん……」

和葉が言い掛ける前に平次は荷物を持ち、体育館から出て行ってしまった。

「（…あんどアホ！俺の気持ちはな……）」

和葉は校内中を走り周り、必死で平次を捜していた。

すると、平次と和葉は下駄箱で遭遇した。

「平次っ！」

「…」

必死な和葉を無視し、平次は先に靴を履き替え下駄箱を出た。和葉も急いで履き替えた。

和葉が平次に追い付いたのは、門を出る前だった。

「平次！なんで逃げるん？！」

「別に…逃げてへん。」

平次は立ち止まることなく、和葉に背を向け返事をした。

「待ってよー！」

和葉は丁度門で、平次の腕を捕まえた。

すれちがいの始まり

「…和葉…。」

「和葉ちゃん！」

平次が和葉に振り向いた瞬間、門の向こうから勇登もやって来た。

和葉はパツと平次の腕を離すと、驚きながら勇登に話し掛けた。

「なんでここが?!」

「…びつくりした? 改方学園って有名だから、場所聞いて俺でもすぐに来れたよ?」

和葉に説明すると、なにやら視線を感じたのか勇登は平次の方を向いた。

すると平次が、勇登を凄く睨んでいる。

「あ…! …お邪魔だったかな?」

笑いながら話す勇登に、平次はそっぽ向き一人帰って行った。

「…ほな帰るわ。」

「あ! 平次、待つ…」

和葉が平次を止めかけた時、和葉は勇登に腕を持たれ止められた。

「えっ?」

「…今は行かない方がいいよ。服部君も素直になったらいいのにね…。」

勇登は平次を見ながら和葉にそつと言った。

「（平次……。）」

和葉が今にも泣きそうな顔をした時、和葉の目の前に長方形の紙が見えた。

「……え」

「あげる」

勇登は人指し指と中指の間に、宝塚のチケットを持っていた。

「これ…。」

「服部君と行って来なよ?」

と言うと、勇登はチケットを二枚和葉に渡した。

「…いいん…？こんな大切なモン…」

「うん、いいっ！」

和葉はチケットを見ると、満面の笑みで勇登に礼を言った。

「おおきにっ！」

「えっ？うん…。」

すると、勇登の胸がドクンと鳴った。

「（ヤベエ…）」

次の日の昼休み。

『平次へ！』

昼休み、絶一対に屋上に来てな！

来おへんかったら平次がヨダレたらしめて寝てる写真、学校中にバラまくしな！

和葉

四限目が終わると平次の携帯にこんなメールが届いていたので、平次は昼休みに屋上へ行ってみた。

「…こんな所に呼び出しよって…。なんやねん…」

「平次ーっ！」

階段の音がしたと思ったら、和葉がやって来た。

「なんや？俺、掃除係で忙しいのやけど…」

「すぐ終わるってえー！」

と言うと、和葉は宝塚のチケットを取り出した。

「これ！もらったんやけど、一緒に行かへん？」

平次に向かい、優しい笑顔で聞いてくる和葉。しかし平次の脳裏には勇登の顔が浮かび上がり、またもや心とは違う言葉が出てしまう。
「いらんいらん！俺はそんな興味ないさかい、パスや！」

平次は屋上の階段に向かいながら、和葉に背を向け話す。

「せやったら、どつか違うところでもいいし行こうや！」

「じゃかあしいー！！しつこいんじゃ！嫌ゆうとるやるー！！」

”ビクッ”

平次の断りに、和葉は少し体が震えた。

「あ……」

平次はきつく言い過ぎたと和葉に近寄るが、和葉はうつ向き話した。

「……やっぱり平次は、アタシのことなんかどうも思っへんのやね……」

横を通り過ぎる和葉の涙が、平次の頬に当たった。

「（和葉……）」

平次はおもいきり叫び引き留めたかったが、声が出なかった。

二人の距離（前書き）

本文に出てくる『トロピカーナランド』とは、私が作った大阪にあるという設定の架空の遊園地です。

遊園地のアトラクションなどは、トロピカルランドと同じです。トロピカルランドとの姉妹遊園地だと思ってくださいね！

二人の距離

その日、平次と和葉は、昼休みが終わってから下校時まで一言も言葉を交さなかった。

「というか、和葉が平次を避けているという感じなのだが。」

「ハア……。」

「どうしたの？ ため息なんかついちゃって？」

和葉が下校していると、後ろから急に勇登の声がした。

「わっ?!」

突然の現れに、和葉は思わず声を上げてしまった。

「そんなに驚くことないだろう？ さっきからオレ、和葉ちゃんの後ろにいたぜ？」

「……そうなん？ ごつゴメンなー！」

和葉は、手を合わせ何度も謝った。

「別にいいよっ！ それより、どうしたの？ 暗いよ？」

「うん……あの……。」

和葉は何か言いかけようとしたが、涙が溢れ話せない。

勇登は女の子の急な涙に、慌てている。

「かつ、和葉ちゃん?! とにかく……! 公園に座ろっ! ねっ?!」

「うん……。」

勇登は近くに見える公園を指差し、和葉を誘導した。和葉は必死に涙を拭っている。

「はい、紅茶。」

公園のベンチに座ると、勇登は自動販売機で和葉に紅茶を買って来た。勇登はコーラを飲んでいる。

「ありがと……。」

少し泣いた後なので、うまく喋れない和葉。

勇登は無言で和葉の隣に座った。

「あんな…勇登君…。」

和葉は紅茶を全部飲み干すと、勇登に平次に断られたことを全て話した。

「はあ?!断った?!しかも聞く耳持たない?!…服部…!!」

興奮したのか、勇登は一人怒っている。平次のことも、いつの間にか呼び捨てにしている。

「んで?何て言ったの?」

「…平次は、アタシのことなんも思っへんのやな…って感じでゆうたんやけど…。」

すると勇登は和葉の体をこちらに向け、両肩を持った。

「いいぞ!和葉ちゃん!!」

「へ?」

「あんな奴、突き離してやったらいいんだよっ!」

一人燃える勇登に、和葉は思わず吹き出してしまった。

「アハハ!おおきに!」

「…和葉ちゃんはやっぱ、笑顔が一番だね!」

笑顔を取り戻した和葉は、宝塚のチケットを取り出した。

「…これごめんなあ。わざわざくれたのに…。せやっ!良かったら、二人で行かへん?」

微笑み聞いてくる和葉に、勇登は残念がられないよう返した。

「その日は用事があつて!友達と行ってくれない?でもオレ、和葉ちゃんに行きたい場所があるんだけど…。」

「何処?」

勇登は、リュックから四折りにしたパンフレットを出し、広げながら話した。

「これ見てよ!新しく出来たトロピカーナランド。今度の日曜日に行かない?」

「ええよ!もちろんや!楽しみやな!」

「良かった!大阪駅でパンフレットもらってから、和葉ちゃんに行きたいって思ってたんだ!」

そして二人は、遊びに行く相談をしながら家へ帰った。

平次の気持ちは…

和葉と勇登が公園で話をしていた頃、平次は家に帰っていてミルクを飲もうとしていた。

「ハァー…」

こちらでも大きなため息をつきながら、上の空でコップにミルクを注いでいる。ミルクが溢れていることも知らないで。

「うわっ！何やつとんねん…！！」

溢れているのに気付くと、平次は慌てて机を拭き始めた。

「…来週から夏休みなのに、全然嬉しくない……。和葉のヤツ…！なんやモヤモヤ…なんやねん…！」

”ブルルルル”

すると机に置いてある平次の携帯電話が鳴った。平次は着信画面を見ると、めんどくさそうに出た。

「……もしもし？」

『あ、俺だ俺！』

「…画面見たから分かつとるわ…」

その電話は、コナンからかかってきた。

『あん？元気ねえじゃねえかよ？』

「……なあ。」

コナンの声を聞くと安心したのか、平次は今の自分の気持ちを話してみた。

「…あんなあ、このモヤモヤなんなんやろ？」

『あん？気持ち悪いのか？』

「せやなくて…！」

平次は一瞬話す相手を間違えたと思ったが、続けた。

「…和葉が他の男とおったら、こっ、なんか今ん気持ちになんねや…！」

『それはな……。』

平次はつばを飲み込んだ。

『前も言っただと思うが、恋ってヤツだよ…』

「はあっ?! 恋イ?!」

平次は真剣に聞いていたのに、こんな言葉が返ってくるとは思っていなかった。

「そんな訳あるかいな。」

そして平次は即答した。

『でも、他の男と仲良くしてたらイラつくんだろ?』

「でも和葉にドキドキなんかせえへんで?」

平次は返ってくる言葉をすべて拒否するよう答えた。

『あのなあ…。それは和葉ちゃんと幼馴染みで、日頃から一緒にいるからとかだろ?』

「…工藤はそんなんゆうとるけど、何でそう思うねんな?」

『ああ?』

平次はコナンをからかってみた。

「自分、幼馴染み〓毛利の姉ちゃんのこと好きやからそんなん言えんのちゃうんけ?」

『なっ…!?!』

コナンは電話でも慌てているのがまる分かりだ。

そしてコナンの口調はだんだん怒りに変わってきた。

『バーロ! 何言ってるんだよ! オメーから話してきたんだろ?!』

「堪忍堪忍! あ、工藤? ちょー頼みがあんのやけど……」

終業式の日。

今日は一学期の終業式。平次と和葉はあれから一言も話さないまま、今日までできてしまった。

「はい! 通知表配るで!」

終業式も終わり、教室で担任から通知表を渡される。平次が通知表をもらうと、クラスの女子はみんな平次に寄って行く。

「服部君ってまたオール5やん!」

「めっちゃ凄いなあ！」

「スポーツも勉強も顔もええし！あたし、好みやわ〜！」

「服部は競争率高いし、あたしらに勝ち目ないって！」

平次は別に嬉しそうでもないが、女子の言葉を聞いている。

「（何なんよ！！平次なんかもう知らん！！）」

そんな光景を平次より後ろの席で見ている和葉は、一人そう思っていた。

平次の思い

終業式も無事終わり、平次は一人で下校した。もちろん和葉とは顔も合わせていない。

「ただいま」。あー！やつと夏休みやー！校長話長すぎやねん……。

「

平次はブツブツ文句を言いながら、家に入った。

平次の声を聞くと、静華が部屋から出てきた。

「平次、おかえりー！アンタ、本間に明日から……」

「あゝあゝ！ええっちゅーんに！」

平次は静華の言葉をまともに聞かず、部屋にこもった。

「…毛利さんに迷惑やんか。」

静華は少し怒りながら、夕飯の準備を始めた。

「ふー！やつと今日から……」

平次は部屋へ入りスクールバッグをベッドに放り投げると、押し入れから大きなカバンを取り出し何やら用意を始めた。

「服は借りるやろ…あとはそれから……」

身の周りの必要なものを、その大きなカバンに詰め込んでいく。

「出来たでっ！これで完璧やー！」

全部詰め終わり、ふくれあがったカバンをボンと叩くと、携帯電話を取り出し電話をかけた。

「工藤か？学校終わったし、明日朝一の新幹線で行くさかいに！起きといてやー！これで完了やー。あー！疲れた！」

実は平次は昨日の電話で、東京へ泊まりに行く話をしていたのだ。しかし探偵事務所は当然無理。そこで平次は、夏休みの間工藤宅に泊まらせるとコナンに頼んだのだ。

「掃除してくれるならて…工藤のヤツもあっさりOKしてくれたモンやな。」

ベッドに寝転び、平次は独り言を言った。

「なんや和葉見てたら推理に集中出来ひん…。安斎のヤツ…よう分からんけど本間ムカツク！！勝手に二人でイチャイチャしとったらええんや！！俺の方から離れたるわ！」

そう。平次は和葉と勇登のことが気になり、二人を見てると変な気持ちになったりするため、離れようと思ったのだ。

「本間嫌やー…」

「堪忍なあ、平次イ。アタシ、勇登君と婚約したんや！18歳になったら結婚すんねん 平次も彼女くらい作りいや！モテンねんから」

「かつ…和葉??」

「そんで、結婚したらアタシも東京に住むねん！もう少しで、アタシらさよならやなっ！…バイバイ」

「…何ゆうつとんねん…?…和葉アーーー！」

”チツチツチツチツ”

シーンとした平次の部屋は、時計だけが小刻に動いている。

「ハアハアハア…夢か……」

昨晚いつの間にか寝てしまった平次は、悪夢でうなされていた。額には大量の汗をかいている。

「……アホたれ……」

ふと時計を見ると、針は三時を指している。

「…まだこんな時間やないかい…。でもまあ余裕で始発乗れるやんけ…ハハ……」

平次は力なく笑うと、荷物を持ち部屋を出てリビングで朝食を済ませテレビなんかを見時間を潰してから、4時30分に家を出た。

和葉の思い

”次は東京駅、次は東京駅！”

「んー！やつと着いたかいな！」

朝5時の新幹線に乗った平次は、二時間程バスに揺られていた。そして背伸びをし、コナンに

「着いたで」

のメールを打った。

一方大阪にいる和葉は、合気道の朝練に出掛けようとしている。平次が東京に行ったことは、もちろん知らない。

「アカン…、遅刻や…！」

そう言うのと和葉は、パンを一枚口にほうばり家を出た。

「いつてきまゝす！」

和葉は学校へ向かう公園の横を走っている。朝の風は気持ちが良い。

「（平次…何してるんやろ？平次も朝練行ってるのやろか…）」

そんなことを思い走っていると、犬を連れた勇登の姿が遠くに見えた。今は話している時間はないと思いきや、向こうが近寄って来たので、和葉は立ち止まった。

「和葉ちゃん！おはよう！」

勇登が手を振り走って来ると、和葉は素早く返事した。

「おはようさん！早いんやね？…その犬は？」

「ああ、コイツ？」

勇登はヨークシャーテリアを散歩させているようだ。

「勇登君って、犬飼ってへんかったやんなあ？？」

「親戚が昨日泊まりに来てさっ！散歩手伝ってるんだ！三匹も飼ってたからさあ！」

「へー！めっちゃ可愛いなー」

と言うと、和葉はヨークシャーテリアの頭を撫でた。そのヨークシャーテリアに、釘付けになってしまったようだ。

「ところで、和葉ちゃんはどうしてここに？」

「アタシはなー！今から部活行くね……そやった！遅刻やねん！ゴメン、また今度なっ！」

思い出したかのように、和葉は慌てて走り出そうとした。

「そっか！部活頑張つてな！それから……明日のトロピカーナランド楽しみにしてるぜっ！」

勇登はそう言うのと、手を振り和葉と反対側へ走って行った。和葉も学校へと急ぐ。

「そうかー……明日やんなあ。勇登君と行くん。」

そう呟いた瞬間、和葉の脳裏にこの間話していた平次との会話がよぎった。

《なー！聞いてっ平次っ！》

《あからさまに、なんやねんな？》

《こないだなあ、大阪にもトロピカーナランドって遊園地が出来たねん！》

《……トロピカルランドのパクリやんけ！》

《真似ちゃうてば！姉妹遊園地やの　なあ、平次イ？今度の合気道の試験で段上がったら、連れてってくれる？》

《はいはい……上がったらなあー！》

《真面目に聞いてよ！頑張るもんー！絶対勝つでー！》

「（……平次と行きたいな……。平次イ……。）」

ライバル

「まったく…。世話のやける奴だ。」

東京駅に着いた平次は、コナンと合流した。そして、二人は米花町へと向かう。

「和葉ちゃんのこととでわざわざ離れるなんてよ…。やっぱりオメー和葉ちゃんのことか……」

「な、ん、や？」

平次は怒り口調でコナンを睨みつけた。

コナンは内心呆れているようす。

「（…まったく。）…戸締まりと火の元は、しっかりしてくれよ！飯ぐらいなら、事務所に食べに来てもいいからよ。」

工藤宅に着いたコナンは平次に忠告すると、別れ際に合鍵を渡した。

「おおきにな、今回ばかりは感謝するわ！」

コナンを見送ると、平次は工藤宅へと入った。

「邪魔すんで！…うひゃー！相変わらず、本だらけやな！頭痛と…なるわ！」

平次は、新一の家の一階一面を見渡しながら呟きながらも、ホームズの本が置いてある棚へと手を伸ばした。

「…暇やし、本でも読も。ホームズでどんだけええんやるか？」

平次がソファ―へ座り本を読み出すと、携帯電話が鳴った。

「こんな朝っぱらから誰や？…非通知やないかい。…もしもし？」

『服部か？』

電話口から聞こえた声に、平次は驚き返事した。

「…安斎？」

『ご名答、ビビった？？』

そう。安斎から電話がかかってきたのだ。

「なんで俺の番号知ってんのや？！」

平次は少し怒鳴り声で話した。

『君のお母さんに聞いたんだよ。勝手に悪いね。でもこれつきり電話しないからさ。許してよ?』

「…ほんで?何か言いたいことでもあるんやろ?ゆうてみいな?」

『よくぞ聞いてくれたねえ』さすが西の名探偵だっ!』

回りくどい相手に、平次は貧乏揺すりをしながら聞く体勢になった。『これも君のお母さんから聞いたんだけど、今東京に行ってるんでしょ?』

「そうやけど?」

『いいのー?好きな子置いてっちゃって?』

「ハア?!何ゆうとんねん!」

平次はまた大きな声で怒鳴った。平次の声は、工藤宅の大きな部屋全体に響いた。

『だゝかゝらゝ!服部が和葉ちゃんのことどうも思っていないんだったら……、オレが奪っちゃうよって言ってたんだけど……?』

「…勝手にせえ!俺には関係あらへん!」

『…分かった。じゃあそうさせてもらうよ……』

ツーツーツー…

勇登は自信のある返事し、電話を一方的に切った。

平次は電話を切ると、肩の力が抜けソファーにもたれた。

「……」

告白

そして日曜日。

和葉は、改方学園の門で勇登と一時に待ち合わせをしていた。

「勇登君、遅いなあ……」

「和葉ちゃん！」

和葉が時計を見ると、勇登が走って来た。そして膝に手をつき息を切らしながら話す。

「ま、待った?!」

「ううん! アタシも今来たところだっ!」

十分も待っていたのに、和葉は何故かそう言い少し気を使った。相手が平次ならいつも喧嘩になるのだが。和葉はそれが逆に寂しかった。

「……。」

「それじゃあ、行こうか?」

「……うんっ!!」

勇登が先頭を行くと、和葉も後から着いて行った。

そして三十分後和葉と勇登はトロピカーナランドに着いた。日曜日ということで、人が多い。

「わー! さすがやね!!」

「やっぱり、パンフレットと実物は全然違うんだねえ。」

トロピカーナランドの入り口を見上げ、トロピカルンドに劣らない程豪華な城の建物に、二人は心うたれた。

「……入ろっか?」

「そうやね! はよアトラクション乗りたいなー!」

一方平次は、ホームズの小説を片手に持ち、ボーっとしている。目

は一点を見つめていて、本を読んでいるのか読んでいないのかよく分からない。

「か…ずは……」

本のページを捲りながら、ただ和葉の名前を一定に呟き続けている。
「あんざ…のやろ…う……」

やっと違う言葉を喋ったと思ったら、次はソファーに寝転んだ。

「…アホらし。何考えてんのや、俺…。」そして、平次はそのまま深い眠りについた。

「あー！今日は楽しかったなっ！」

アトラクションをほとんど全て乗り回し、和葉と勇登はトロピカーナランド内のベンチに座った。もう夜の八時三十分だ。来客も少ない。

「パレードも見れたし、めっちゃ最高やったわぁ」

「パレード、本当に綺麗だったもんね！」

「うん」

「あ…！」

勇登は、自分の鞆に手をつ込んだ。それを見た和葉はとっさに質問する。

「どしたん？」

「渡したいものがあるんだけど……ジャーン!!」

そついうと、勇登は小さな箱を和葉に見せた。

「これ…アタシに？」

「開けてみて？」

和葉は勇登からその箱を受けとると、箱を開けびっくりした。

「…これ。」

「びっくりした??」

箱の中には、ハートのリングが入っていたのだ。

和葉はその指輪を手にとった。

「……」

「ごめんね、安物で！さすがに本物のダイヤとかは無理だからさー！」

「…ええん？……アタシにこんな…指輪やん……。」

「当たり前だよ？」

勇登は、びつくりして動かない和葉の手からその指輪を取り、和葉の薬指にはめた。

「…好きだよ。僕の恋人になってください……」

勇登はそれだけを伝えると、和葉の唇に自分の唇を近付けた。

両想い

「（勇登君……。）」

和葉は目をつむったが、唇が触れ合う直前で反射的に手を前に出して拒否してしまった。

「……和葉……ちゃん？」

勇登も目を開け、不思議そうな顔で和葉を見た。和葉は泣きそうになりながらも、勇登に自分の正直な気持ちを伝える。

「……あんな、アタシ、やつぱり……平次しかアカンねん……。平次に嫌われててもええから……平次の側におりたいねん……。やから……勇登君とは……」

「……やつぱりね……」

「へ？」

相手の意外な一言に、和葉はびっくりした。

「……和葉ちゃん、オレという時は服部という時みたいに楽しそうじゃないもん。それを承知でオレもここに誘ったんだけどさ……」

「勇登君……」

「まっ、服部に取られる前に、無理矢理和葉ちゃんを奪おうとしてたのかもな、オレ。ごめんな……」

勇登は真剣な眼差しで和葉に話し終わると、和葉から指輪を受取りしまいながら苦笑いで話した。

「ハハハ……分かってただけだな……。和葉ちゃんの相手は、服部しかいないんだよな。」

「……ありがとうな。アタシ、告白されたん初めてやねん」

「和葉ちゃん……。……ねえ、服部はさ、今東京の工藤新一宅にいるんだって！行ってあげなよ？その気持ち、服部にぶつけてきな？」

勇登は自分がショックを受けながらも、和葉の幸せのことを想い服部のことを話した。

「平次、今東京におんの？」

「…みたいだぜ。」

「じゃあ……アタシ今すぐ行って来る！！ありがとうー！！」

和葉はそう言うのとベンチから立ち上がり、自分の鞆だけを持って一人トロピカーナランドを飛び出して行った。

勇登はそんな和葉を見送り、一人呟いた。

「あーあ。夜なのに本当にこれから行っちゃうのかな？……服部、和葉ちゃんを幸せにしろよ。泣かせたりしたら、次は本当にオレが奪っちまうぜ……」

「あーー！！暇やー！！テレビもなんもない！眠たないし寝られへんやんけ……！！」

一方平次は、勇登との電話の後から部屋をウロウロしたりやけ食いをしたりで、和葉のことを考えすぎてなかなか落ち着けないでいた。

「…工藤んとこに行つたるか。いや…またからかわれるな……」

ソファーに座り携帯を持ったり机に置いたりしていると、インターホンが鳴った。

”ピンポン”

「誰やこんな時間に……！！」

平次はドアを開けようとしたが、コナンに言われたことを思い出し立ち止まった。

『いいか？チャイムが鳴ったら気を付けろよ？奴ら（黒の組織）の可能性があるかもしれねーからよ……。絶対、確認してから出る……！確認ナシにドアを開けて、銃で撃たれても知らねーぞ。』

「あ、せやった。」

そして平次は恐る恐るドアについている穴を見た。すると、大粒の涙を流し一人立っている和葉の姿が見えた。

「和葉っ？！」

平次はすぐさまドアを開けた。

「へ……いじ……」

「お前一人で来たんか?! もう11時やぞ?!」

そう。今は夜の11時だ。和葉はあれからすぐJRに乗り、ここまで来たのだ。

「だって……」

「とにかく、あがれや……」

平次は和葉の肩を持ち、家の中へ誘導した。

「…落ち着いたか?」

「うん。おおきに……。もう大丈夫やでっ!」

和葉はココアをもらい飲み干すと、元気に返事してみせた。そして平次は和葉の隣に座った。

「どうしたんや?」

「あんな……。アタシ勇登君に告白されたんや。」

「えっ……?!」

平次は自分の恐れていたことを聞き、固まってしまふ。そんな平次に、和葉は優しく喋りかけた。

「でもな! アタシ、断ってん! そしたら、平次がいるとこ教えてくれはったから、来たんやで?」

「…明日でもええやないか……。こんな夜遅うに……」

平次は心配しながら和葉を見ると、和葉は平次にもたれた。二人の肩が触れ合う。

「かつ、和葉?」

平次はいきなりの行動に、少し動揺している様子。

「アタシな……。アタシ、平次のことが……」

「和葉……。……。ん? 和葉?」

突然体重がかかったので、平次は肩を持ち和葉の体を自分に向けた。……なんや……。寝てんやないかい……。」

「スー……。スー……」

昼間は遊園地で遊び、それから東京まで来たのだ。疲れるのも無理はない。

「……おやすみ。…和葉？俺もお前のことがな……」

寝ている和葉に言いかけると、平次は和葉をベッドに運び、自分も隣のベッドに寝た。

「…和葉のこと、めっちゃ好きやで。」

あとがき

チュンチュンチュン

小鳥の声が聞こえる。平次は和葉の隣のベッドで寝ている。昨夜はあれから平次もすぐに寝てしまった。

「……んー……！」

朝七時。和葉はいつもの調子で早く目が覚めてしまった。辺りを見回し、寝起きで少しボケているが。

「……ここどこや？……あつ。そういえば、昨日こっち来てもーたんやった。あ……。フフフ……」

和葉はすぐに状況を把握し、隣で寝ている平次を見ると笑ってみせた。平次は布団を落とし、寝相悪く寝ている。和葉はそんな平次に近寄った。

「へーいじっ！起きてよー？」

「うう………」

平次は和葉の声を認識したのか、目を開いた。

「おはよっ！平次っ！」

「ああ……和葉か……」

起きてすぐに和葉を見て安心したのか、平次はまた目をつむった。

「……俺……まだ寝るわ……」

寝起き悪いなあと思いつつも、和葉は平次を揺さぶり起こす。

「アカン！なあ！早く起きてよ！」

「……なんでや……」

目はまだ寝ているが、平次は体を起こした。

「おはようさんっ」

「……ああ……おはよ………」

「なー？目エ開いてへんでー？」

「……開いてるわ……」

和葉は平次の目の皮膚を持ち、カッと開けた。

「わっ???!」

「ホラ。まだ起きてへんかったやない。」

「無理矢理やんな! ドアホ!」

「へー。それが彼女に言う言葉なん?」

和葉は手にあごを乗せ、じと目で平次に聞いた。すると平次は意味が分からないという顔で、和葉に返事した。

「彼女おー?! なんでお前が俺の彼女やねん。」

「やって!! アンタ、トロピカルランドで告白してくれたやんか!」

「は? 和葉、何ゆうとんねんや? 二人でトロピカルランドなんか行ったことないやろ?」

「へ...?」

和葉はまぬけな顔をし平次を見ると、少し考え込んだ。

「あー!?! そうやん... 夢やった...」

「完全なアホやな...」

和葉は恥ずかしさを隠しながら、平次に謝った。

「アハハ... ごめんなあ...。あ! でも、現実の平次はアタシのことどー思ってるん?」

「な...?! なんでそんなん聞くねや!!」

「それは...。ノノノ」

二人共恥ずかしくなり、少し沈黙が続いたが、平次が口を開いた。

「... お、お、俺はなっ、かかか... 和葉のことが... 好きやで?」

「平次イ...。フフフ!」

「なんやねんなっ?!」

恥ずかしい思いで告白したのに、和葉に笑われ平次は機嫌を悪くした。

「なんやねん! 俺が普段言わへんことゆうたからて笑いやがって...」

「... おっお前はどうかやねんな?!」

「アタシは...。アタシも平次のこと好きやで? 大々好きやつ!」

「……／＼／…アホ。」

すると平次は和葉を抱き寄せ、どちらからともなく唇を合わせた。

「なあ、平次イ？今日蘭ちゃんち行こうと思ってんのやけど…アタシがいたらびっくりしはるやるか？」

「当たり前やわ。」

「でもっ！！平次の彼女やねんから、いつでも一緒にいてもええやんなあ…！」

END

あとがき（後書き）

ここまで読んでもらってありがとうございますm（――）m
ちゃんとラブラブになっていきますでしょうか？

この平次は、ダメですね（笑）

和葉にリードされてては！

でもまあ、平次と和葉がラブラブになって良かったです♪

でも一つ問題がっ…？！

小説名のことですよ（笑）

ベタなんで変えようかと…（爆）

いいアイデアがありましたら、教えてください！（笑）

良かったら採用しまーす！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8814a/>

大阪恋物語

2010年10月9日01時20分発行